氏　　名	関根　全宏
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲第４０９号
学位授与年月日	２０１５年9月１９日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	A Poetics of Hybridity: Herman Melville’s Oceanic Imagination and Generic Heterogeneity （混交の詩学――ハーマン・メルヴィルの海洋的想像力とジャンルの多種性）
審 査 委 員	（主査）舌津　智之 後藤　和彦 千石　英世（立教大学名誉教授・ 元立教大学文学研究科比較文明学専攻教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１） 論文の構成

本博士論文は、183 頁から成る英語論文であり、その構成は以下の通りである。

Acknowledgements
（謝辞）

Contents
（目次）

Introduction
（序章）

Chapter 1
Innovators of Literary Genres: Coleridge, Wordsworth, Poe, and Melville
（文学ジャンルの革新者――コールリッジ、ワーズワース、ポウ、メルヴィル）

Chapter 2
Ishmael the Poet: *Moby-Dick* as a Romance, the Second Voyage
（詩人イシュメール――ロマンス、二度目の航海としての『白鯨』）

Chapter 3
Images of the Sea and Marriage: “The Scout toward Aldie” as a Ballad
（海と結婚のイメージ――バラッドとしての「オールディへの斥候」）

Chapter 4
Toward a Pre-Modern Paradise: An Outsider’s Poetics in Melville’s “John Marr”
（前近代的楽園に向かって――メルヴィルの「ジョン・マー」における余所者の詩学）

Chapter 5
Epic and Lyric: Melville’s Use of the Folk Ballad in *Billy Budd*
（叙事と抒情――『ビリー・バッド』におけるメルヴィルの民衆バラッド）

Conclusion
（結論）

Notes
（註）

Works Cited
（引用文献）

（２） 論文の内容要旨

本論文は、19 世紀のアメリカを代表する文豪、ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）の作品における主題と形式の相互作用を明らかにすべく、海をめぐるモチーフとジャンルの融合に焦点をあわせ、小説家であると同時に詩人でもあったメルヴィルの想像力を再定義する試みである。具体的には、直接ないしは間接に海のイメージが描かれる作品を取り上げながら、散文における詩的言語と詩作品における散文的要素を検証し、とりわけバラッドというジャンルの修辞的効果を分析しつつ、雑多な要素を飲み込む象徴的磁場としての海が持つ意味作用に光を当てる。その際に重要な鍵となるのが、叙事と抒情の関係性という、本論文の中核を成す問題意識にほかならない。

本論文の序文は、まず、メルヴィル・リヴァイヴァルと呼ばれる 1920 年代の批評的再評価の時代から話を起こし、詩人メルヴィルの研究動向を歴史的に整理する。その後、「叙事詩」と「抒情詩」の概念規定を確認したうえで、メルヴィルにおける混交の詩学と海洋的想像力との有機的な連関について、本論全体の見取り図が示される。メルヴィルは、海洋冒険譚の第 3 作目にあたる『マーディ』（*Mardi*, 1849）において数多くの詩を小説中に挿入して以来、その散文作品においても詩的な表現を多用する一方、1860 年代以降は積極的に詩集も出版するようになっていく。そこで留意されるべきは、作者の歴史認識（叙事的要素）と、それに向きあう個人の主体的な経験や私的感情（抒情的要素）とが、海のイメージをともなって同時に立ち現れることである。この二面性は、メルヴィルにとって、海という修辞的空間が、現実を認識する場でありつつも、その渦中に生きる（あるいは死にゆく）個人を思索／詩作する場でもありうる事情を透かし出す。

第 1 章では、本論文の理論的前提となるジャンル論を提示すべく、メルヴィルが依拠していた過去の文学的土壌が説明される。本章の主目的は、英米においてメルヴィルの同時代に存在していた、詩と散文をめぐる創作理論を比較することである。そこで、英国ロマン派の詩人であるウィリアム・ワーズワース（William Wordsworth）、サミュエル・テイラー・コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge）、さらには米国の詩人エドガー・アラン・ポウ（Edgar Allan Poe）による詩論が比較検討される。これらのテクストが、いずれもジャンルの融合に関わる議論を展開している点は興味深い。とりわけ、ワーズワースによる『抒情民謡集』（*Lyrical Ballad*, 1798）の序文からメルヴィルは多くの示唆を得た。本論文の第 3 章以降に詳述される、バラッドというジャンルの刷新が目論まれているからである。しかし、バラッドの抒情性を強調したワーズワースとは対照的に、バラッドの叙事的可能性を探究し、それを抒情性と融合させようとしたのがメルヴィルの特異性であった。

第 2 章は、メルヴィルの代表作である『白鯨』（*Moby-Dick*, 1851）の語り手イシュメールが、詩人であるという仮説を提起する。この小説は、散文作品でありながら、すぐれて詩的な言語に彩られている。そして、イシュメールが詩人でありうるのは、彼が、愛するものの喪失を悲しむロマンスとして本作品を語っているからである。語り手の詩的言語はそれゆえ、モノフォニックな主情性を帯びることとなり、歴史に記録されえない主体的経験を記述する一つの重要な方法となる。この主情性こそが、散文作品のうちに詩的言語を散りばめたメルヴィル的想像力の核心を成す。イシュメールは、一連の鯨学の章に顕著なごとく、科学的知見を用いながら捕鯨業について客観的に記述する一方で、きわめて私的／詩的な己と向きあう瞬間があり、このような語り手の両義性は、以後の章に展開される主題的かつジャンル的な混交性の議論を準備する。

第 3 章は、メルヴィルにとって核心的な詩の形式であると思われるバラッドに注目する。バラッドは、船乗りとしてのメルヴィルには馴染み深い船上の労働歌でもあり、捕鯨船や軍艦において必要となる集団的行動を導く役割を持つ。また、バラッドは物語性・歴史性を含む点において叙事詩と親和する一方で、個人的感情の発露である点においては、抒情詩とも決して無縁ではない。このような視点から、本章は、メルヴィルの物語詩である「オールディへの斥候」（“The Scout toward Aldie,” 1866）を、バラッドとして捉え直す。また、本作品における追跡のレトリックが『白鯨』とパラレルな関係にあるとする先行研究を発展的に継承し、海のイメージがもたらす修辞的効果に新たな考察を加えている。バラッドの再定義という目的において、本章は以下の第 4 章、第 5 章における議論へと連続するものである。

第 4 章は、メルヴィル後期の作品にしばしばみられる形式として、散文と韻文とが同時に対置された作品（prose-and-verse writing）を考える。散文のナラティブに韻文の結末が対置されるこのようなテクストは、一種の「拡大バラッド」とみなしうる。すなわち、散文部分は少なくとも主題の面においては詩の一部であり、作品全体は、異なる形式の融合により、歴史性と個人性とを同一テクスト内に共存させる構造を持つ。具体的には、「拡大バラッド」の典型として、メルヴィル後期の第 3 詩集『ジョン・マーとその他の水夫たち』（*John Marr and Other Sailors*, 1881）に所収された表題詩を取りあげる。本作品では、その散文部分において、アメリカ白人の開拓者が先住民を周縁化する歴史的ナラティブが語られる一方、韻文部分では、詩人としての語り手が、周縁化された他者の個人的感情に寄り添っている。しかし、個人的な回顧録とみなされがちな本作品が、通時的ないしは歴史的な視点から、前近代的楽園の破壊をもたらす文明に抗っている事実こそ、強調に値する。

第 4 章で論じた「拡大バラッド」の究極形は、第 5 章が扱う死後出版の中編小説『ビリー・バッド』（*Billy Budd*, 1924）にほかならない。本作品は、散文作品の最後に短いバラッドが添えられているように見えながら、視点を変えるなら、クライマックスを成すバラッドの前置きとなる説明部分が膨らんだ作品であるともみなしうる。従来、本作品の批評は、散文部分の歴史性／物語性を特権化し、これを結末の韻文とは別個に扱ってきた。しかし、メルヴィルが、主体的な経験と私的な感情を歴史的文脈に内包させるべく、異なるジャンルの混交を実践している点は見逃せない。「拡大バラッド」は、散文と韻文という異なる形式を、たとえば『ビリー・バッド』であれば善と悪といった両義的な主題の面において関連づけ、反転させ、あるいは融合させることにより、歴史性と個人性の相克を形式面からも照らし出す、メルヴィル独自の混交ジャンルである。

最後に、結論部は、詩と散文、そして抒情と叙事という、異なるモードの混交を生み出すメルヴィル的な詩学を総括する。また、コールリッジ、ポウ、ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）、ハート・クレイン（Hart Crane）など、海に関わる作品を書いた詩人の具体的作品にふれながら、本論文がより発展的な「海洋研究（Oceanic Studies）」の系譜学へと開かれていることを視認する。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1)　論文の特徴

本論文は、メルヴィルの詩的な特質を再評価する近年の批評的いとなみと軌を一にするものである。しかし、詩作品を論じるにせよ、散文の詩的な側面を論じるにせよ、メルヴ

ィルのジャンル横断的な想像力に特化した先行研究は思いのほか少ない。従来のメルヴィル批評のほとんどは、海の表象と文学ジャンルの問題を、それぞれ別個に論じるのみであり、両者の関係性については必ずしも検証されてこなかった。しかし、その二つの問題は決して無関係ではなく、それらが叙事と抒情の関係という枠組みに再定位されるとき、そこには、作者の歴史認識と抑圧された個人の密やかな思いとが等しく浮かびあがるのだと本論文は主張する。

こうした問題意識のもと、第 1 章は、メルヴィルと他の詩人の関係という枠組みから、英米両国の詩論を取り上げ、メルヴィルのジャンル認識を再検討するものである。メルヴィル作品におけるジャンルの問題については、ニーナ・ベイム（Nina Baym）やシーラ・ポスト＝ローリア（Sheila Post-Lauria）などの批評家が注目してはいるものの、具体的にどのような作家の影響が背景にあるかという点については批評的分析が乏しい。本論文は、詩と散文、抒情と叙事の越境について論じるロマン派詩人の文学論を取り上げて、いまだ未開拓の領域である、メルヴィルのジャンル意識を培った水脈に光を投じる試みである。

第 2 章は、第 1 章で論じた詩と散文、抒情と叙事の境界をめぐる侵犯性に留意しつつ、メルヴィルの傑作『白鯨』を取りあげ、その語り手が紡ぐ散文における詩的言語の使用を再検討するものである。多くのメルヴィル批評家が、本作品を多様なジャンルと連想づけることで、多層的ないしはポリフォニックな側面ばかりを強調してきた一方、語り手の詩人としての資質についてはこれまで正面から論じられたことがなかった。こうした批評的空隙を埋めるべく、本章は、語り手のモノフォニックな声に注目することで、歴史に記録されえない主体的経験に積極的な意味を付与するものである。

第 3 章は、メルヴィルの戦争詩を取りあげて、バラッドの修辞的使用に焦点を当てている。本章の特徴は、南北戦争と海のイメージとの結びつきを、叙事と抒情というバラッドの二面性から明らかにする点にある。メルヴィルの『戦争詩集』（*Battle-Pieces*, 1866）におけるこの二面性については、ヘレン・ヴェンドラー（Helen Vendler）の論考もすでに存在しているが、本章は、ヴェンドラーが論じていない作品に注目し、戦争という国家の悲劇的な歴史体験と、それによって引き起こされる個人的な悲哀とを、バラッドの二面的性質によってメルヴィルが偏りなく描いている点を明らかにする。

第 4 章および第 5 章は、メルヴィル後期作品の中でも、散文と韻文とが対置された特徴的なスタイルの諸作品を取り上げて、論者が「拡大バラッド」と名付ける越境的なジャンルの可能性を掘り下げる。散文と韻文とで構成された作品の検証に関しては、ウィン・ケリー（Wyn Kelley）やジョン・ブライアント（John Bryant）の批評を除き、これまでほとんど注目されていない。また、いずれの批評家も、それらの問題を海の表象をめぐるテーマ論と関連づけては論じていない。メルヴィルは、バラッドというジャンルの修辞的効果を、詩という形式の外側に隣接する散文において活用することで、歴史的コンテクストにおける主体的体験の再定義――すなわち、叙事性と抒情性の融合――を実現する手段を手に入れたのだと本論文は結論づけている。

海洋的想像力とジャンルの混交という枠組みから、メルヴィル批評に新たな視座を提供しようとする本論文は、小説家メルヴィルと詩人メルヴィルの重なり、すなわち、ジャンルの変奏者としてある作家の創作理念を検証することで、歴史性と個人性とを等しく文学の領分に定位しようと試みた点が最大の特徴である。

(2)　論文の評価

本論文は、以下の諸点に鑑み、ハーマン・メルヴィル研究の発展に資する学術的な意義を有するものと判断される。

第一に、本論文は、これまで主として小説家として受容されてきた文豪メルヴィルについて、その詩人としての側面に光を投じる野心的な試みである。詩人メルヴィルの再評価は、とりわけ 21 世紀以降、すでにそれなりの批評的蓄積もあるとはいえ、それらはいずれも詩というジャンルの領域内にとどまる研究であり、詩と散文という様式の越境ないしは融合については今なお十全な議論がなされていない。本論文は、バラッドといういわば中間ジャンルに着目することで、叙事詩と抒情詩の攪乱、ひいては詩と散文の脱構築を見据えるものであり、メルヴィルという作家の立体的な全体像を照らし出すことに一定の成果をあげている。

第二に、本論文は、イギリス文学とアメリカ文学を往還する試みである。英国を代表するロマン派の詩人たちがメルヴィルに与えた影響を精査することにより、国境の内側に囲い込まれがちな外国文学研究を、広く豊かな文脈へと解き放っている。独立した国家的アイデンティティを模索する 19 世紀のアメリカにとって、英米の二国間をめぐる両面感情は核心的なテーマとなりうるが、旧大陸の文学伝統を肯定的に受け継ぐメルヴィルの詩学は、同時代の自国のナショナリズムを相対化する方法でもあることを、本論文は鋭く受け止めている。

第三に、近年、人文学と地理学、政治学とを横断する「海洋研究（Oceanic Studies）」が注目されている批評的文脈を念頭におくならば、本論文における海の問題系への着目は、最新の学問的潮流をふまえた発展的かつ学際的な可能性を秘めたものであると言える。とりわけ、一見すると海とは関係のない、陸を舞台にした詩作品のうちに海洋的想像力を読み込む第 3 章は、本論文の白眉であるとの評価で審査委員の意見は一致した。この長所は無論、上記第二の長所である国家横断的な可能性とも連動するものである。

第四に、公的領域と私的領域のダイナミックな関係性を掘り下げたことも本論文の特筆すべき功績である。捕鯨業、南北戦争、アメリカ開拓史、軍国主義といった歴史に対する認識と、歴史には記録されない詩人／私人の主観とを等しくすくい取ろうとする本論文は、まさしくメルヴィル自身の文学的意匠を忠実に再演するものであり、ここにおいて、叙事詩の歴史性と抒情詩の個人性とが、互いを打ち消すことなく共存しうる地平が批評的に開示されている。

第五に、人文学研究の国際発信を念頭におく際、英語表現そのものの洗練を軽視することはできないが、その点、本論文は達意の英語で執筆されており、広く国外の研究者の目にふれても問題のない言語表現レベルに達している。

研究内容に関し、本論文が提起する問題の射程は広範にわたるので、現状では取り扱うテクストの数がいささか限られており、願わくは、さらに多くの作品群に即して議論を補強することで、今以上に量的な説得力のある検証が望まれるとの意見も出されたが、それはあくまで未来に向けての期待であり、本論文が達成した現時点での功績を大きく損なうものではない。近年、アメリカ国内のみならず、環太平洋地域における学術交流が飛躍的に進みつつあるメルヴィル研究の発展に向け、海洋的想像力の重要性を訴える批評的視座は、国際的にも高い将来性を秘めた学術貢献であると評価されてよい。

以上の諸点を勘案し、本審査委員会は、本論文を学位に値する有意味な研究と認めるも

のである。